

## 公開シンポジウム開催報告

### 「サンゴ、〈野生の科学〉と出会う」

大会最終日の11月29日(日)午後、公開シンポジウム「サンゴの海、〈野生の科学〉と出会う」を開催しました。会場には200名を超える方々が集まり、人類学者、中沢新一さん(明治大)の目くろめく話しの展開に皆さん引き込まれていきました。講演に続き、中村征夫さん撮影のサンゴの海の作品が次々とスクリーンに映し出されるとともに、田中麻理さんが奏でるアイリッシュハーブの音色で会場が満たされました。

そもそも「野生の科学」とは何でしょう。もちろん野生生物についての科学ではなく、近代以前の思考のあり方を科学するという意味です。中沢さんは、その科学を説明するために「不思議な環」というキーワードを用います。近代科学の研究室や教科書の中では、自然は異なる領域や分野に細分化されていますが、ひとたびフィールドに出ると、植物・動物・人間が当たり前に繋がり、全体を織りなしています。その繋がりを「不思議な環」と呼び、たとえば伝統社会の神話にあふれる自然と人の豊かな関係にそのヒントを探るわけです。今回の講演では、レイチェル・カーソンの語りを借りて「絶えず生命が創造され、また容赦なく奪い去られている」海辺へと私たちを誘い、縄文晩期の環状木柱列を子宮のアナロジーとして、また同時期の勾玉を魚期の胎児として語り、神楽に誘われて海中より現れる安曇(アズミ)の磯良(イソラ)の伝説へと旅する展開でした。牡蠣殻やフジツボが顔中に付着した磯良は、海と陸を行き来しながら両世界を繋ぐ神とい



写真1:「海辺」を語る中沢新一さん

うわけです。中沢さんの意図は、異なるものが出会い繋がる海辺としてサンゴ礁を位置づければ、その包括的な研究が生と死、海と陸、生命と物質を統合する総合科学たるのではと問うことにありました。日本の森のホーリスティックな理解を目指した南方熊楠の科学のように。

シンポジウムの最後に、鈴木款さん(静岡大)、柳谷牧子さん(環境省)、茅根創さん(東大)、山野博哉さん(環境研)とともに中沢さんを囲んでコロキウムを持ちました。司会は、深山直子(東経大)さんと私が努めました。中沢さんに触発されて大いに盛り上がった私たちの思考は、「パサージュ」(行き来)するサンゴへとたどり着きました。考えてみれば、たった1つのポリプが無数に分裂して群体をつくるサンゴにとって、個体としての生と死の境は曖昧です。受精したプラナラ幼生は波に漂って移



写真2:中村征夫さんの作品にあわせてハーブを奏でる田中麻理さん

動しますし、着定してからは海面に向かって成長します。海面が急速に上昇した完新世には数千年の時をかけて炭酸カルシウムの骨格を積み上げ、サンゴ礁という地形を生み出しました。そして今、海水温の上昇とともに南のサンゴは温帯へと分布を広げつつあります。

生と死の間を、生命と物質の間を、そして海の中をパサージュする不思議な存在としてサンゴをアピールしてみてもどうでしょうか。さらには、サンゴの海を水景として私たちの身近にもたらずアクアリウムの試みも、サンゴからすれば海と陸の間のパサージュと言えます。そんな語りを通して、もっと多くの人びとをサンゴの海に結び付ける「不思議な環」を日本サンゴ礁学会は生みだせるかもしれません。

(文責: 山口徹・慶應義塾大学)

## 「コーラルカフェ」企画報告

### 「コーラルカフェ」企画

大会期間中の28、29日は教室を活用した「コーラルカフェ」が、あらたな試みとして提供され、研究者や一般参加者などでいつも賑わいをみせておりました。このコーラルカフェでは無料のコーヒーがふるまわれた他、9社の企業様による製品展示や水槽ディスプレイも行われ、来場者の憩いの場として多くの方が訪れました。企業展示ブースでは、オリンパス、CCS、ナモト貿易、旭光通商、サイエンスアイ、O.R.E.がブースを出展。サンゴ礁保全啓発活動のパネル紹介や、サンゴ飼育用照明機器、計測機器、ダイバーの為の水中カメラなどが展示され、訪れる方はそうした精密機器を手に取り熱心に説明を受けておりました。また、大会初の試みとして展示されたアク

アリウムは、MMC、マメデザイン、TOJOグループの提供より実現し、石垣島やアクアリストにより養殖されたソフトコーラルがレイアウトされ、多くの来場者の関心を引き付けておりました。

この会場では、玉川学園や喜界島の小中高の学生が、日頃のサンゴの研究成果を12枚のパネルにまとめ展示されました。訪れる研究者の方々に熱心に解説を行う姿は、とてもほほえましく、多くの来場者の心を掴んでいました。

コーラルカフェは、研究者とアクアリスト、パイパー、そして一般の方々の交流の場としても活用されました。

高野 貴士(株式会社アクア環境システム TOJO)



写真:コーラルカフェにて展示された水槽

### 玉川学園中学部SSHサンゴ研究班のポスター発表を見て

中・高校生の研究発表を聞いて面白いのは、大人の研究者がやりそうもない実験をやって面白い結果を出すことがあるからと思われま。生き物に接して無心な目で観察するために、思いもよらない、あるいは先端的な発見につながる可能性があるためかもしれません。

今回時間の関係で2題しか説明を聞くことができませんでしたが、どちらも非常に興味深い発表でした。サンゴを暗黒下で飼育するとどのくらい生きるのでしょか? サンゴに24時間光を当てっぱなしにすると、いっそう成長するのでしょうか、それとも光ストレスから回復する暇がないので白化するのでしょうか? 齋藤君の実験では、ミドリイシの枝は暗黒下でも1ヶ月は生きること、24時間光を当て続けると白化するが、少ないながらも

成長し、回復することもあることを明らかにしました。

もう一つの発表は、ミドリイシの枝をタテヨコいろいろな方向で切断し、切断面からの再生のしかたを調べたものでした。再生過程を調べることにより、サンゴをより早く大きく育てる方法を見つけようとして始めた実験です。切断のしかたによって、切断面から蛍光色を放つ多くの成長点が現れる場合や、基盤の被覆を先に行うため成長点形成が遅れる場合などが見られました。特に再生部位で蛍光が強まることは、最近他の研究者により報告されましたが、先端的な発見と言えます。

玉川学園内のサンゴ飼育水槽システムの改良を続けながら、サンゴの研究、保全活動を続けていってほしいと思いました。

日高 道雄(琉球大学理学部海洋自然科学科)

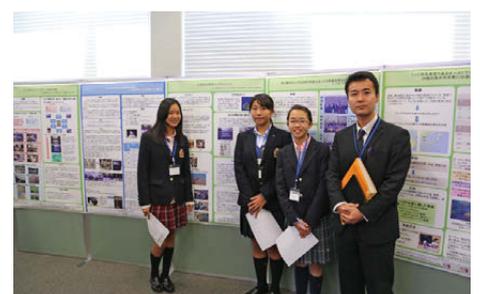


写真:ポスター展示する玉川学園のみなさん